



夜空の星は幻か

Real or Illusion, the stars above

永田円了

夜空にきらめく星は、果たして実像か、幻か。答えは“残像”である。星は確かに実体であり、光を放ち、宇宙のどこかで燃えている。科学的には、それは物質であり、現実の存在である。けれど、私たちが夜空で見ているその光は、何百年、何千年も前に放たれた光。中には、すでに消失してしまった星の光もある。

星は、虚でもあり、実でもある。実体として存在していても、私たちが見ているその姿は幻。過去の残像なのである。でも、だからこそ美しいのではないか。消えた星の光が、今も夜空を照らす。虚が実を照らすとき、人の心もまた輝く。

『ラ・マンチャの男』―― 見果てぬ夢を生きる

人はなぜ夢を抱くのだろうか。それが叶わぬことを知りながらも、なお空に星を探す。ドン・キホーテは、風車を巨人と思い込み、やがて笑われ、傷つき、倒れる。けれども「狂気」は、現実屈した者たちの沈黙よりも、はるかに真実に近い。

ドン・キホーテが信じたのは、幻ではない。人の心の中にある「崇高さ」だった。たとえ世界がそれを笑っても、彼はなお信じ続けた。「人間は理想を追う限り、美しい」と。現実の牢獄の中で、セルバンテスが物語を語るように、私たちもまた、日々の喧騒の中に小さな夢を紡ぐ。夢を捨てた瞬間、人はただの「生き物」に戻る。しかし、夢を見続ける者だけが、「人間」として生きるものであろうか。

『ラ・マンチャの男』は、現代に生きる私たちにも深く響く普遍的なテーマを多く含んでいる。ドン・キホーテの想像力は、灰色の現実を鮮やかに彩り、周囲の人々の心にも変化をもたらす。既存の枠にとらわれず、新しい視点や発想で物事を捉えることの重要性を示唆している。売春婦アルドンサは、ドン・キホーテによって「美しきダルシネア姫」と呼ばれ、尊厳を取り戻してゆく。彼女は当初、その言葉を嘲笑するが、やがて彼の純粋な心に触れ、人間としての誇りや希望を見出してゆくのである。



『母の待つ里』～ 魂が帰る場所 ～

40年ぶりに帰ったふるさとには、年老いた母が待っていた――。大手食品会社社長として孤独を感じている松永徹。退職と同時に妻から離婚された室田精一。親を看取ったばかりの女医・古賀夏生。還暦前後の悩みを抱えた3人が、懐かしい山里の家で不思議な一夜を過ごすのだが、...

里にいる「母」は、完璧な母性をもつ存在として描かれ、登場人物たちはそれぞれの求める「理想の母」の姿をこの人物に重ね合わせる。それは、悩みを聞いてくれる存在、無条件の愛情をくれる存在。心が安らぎを取り戻せる里。この「母」との出会いを通じて、登場人物たちは過去と向き合い、自らの内面を見つめ直し、新たな人生の一步を踏み出すきっかけを得るのである。

『文学は何の役に立つのか?』の著者・平野啓一郎氏は語る。文学は「今ここ」という自分の実存の限界状況から解放してくれる。しかも、解放されるだけでなく、別のネットワークに自分が接続されてゆく。“今の世の中で、正気を保つため”に。

<事 例>

『ラ・マンチャの男』ドン・キホーテの物語

劇作家・寺山修司、現実をイリュージョン（虚）によってくつがえす

小川洋子著『猫を抱いて象と泳ぐ』文春文庫、

歌人・正岡子規、病床六尺、背椎カリエス、心は世界を駆け巡る

夏目漱石『三四郎』、日本より頭の中のほうが広いでしょう

浅田次郎作『母の待つ里』人は誰しも母の記憶の中に還っていく

『バニラ・スカイ』2001年米映画、現実と夢のあいだ

ホーキング博士、「虚時間」を語る

矢沢栄吉のつばやき、「一瞬のきらめきがあったら、俺まだ大丈夫」

歌・矢沢栄吉『真実』嘘だらけの世界で、たったひとつ Love is true

平野啓一郎『文学は何の役に立つのか?』岩波書店

